

【論文提出者】 社会文化科学教育部 人間・社会科学専攻 公共政策学領域

氏名 ワーギリイ フランシス

【論文題目】 Power Perceptions and Political Participation in the Digitalized Era: How Internet Digital Media is Transforming Politics in Papua New Guinea

(デジタル時代における権力の認識と政治的参加—インターネットデジタルメディアが、パプアニューギニアの政治をどのように、変えてきているのか)

【授与する学位の種類】 博士 (公共政策学)

【論文審査の結果の要旨】

フランシス・ワーギリイ君の論文「Power Perceptions and Political Participation in the Digitalized Era: How Internet Digital Media is Transforming Politics in Papua New Guinea」は、今日のパプア・ニューギニアの政治が経験しつつある、選挙や政党という民主的制度の存在を超えた、デジタルメディア時代の新しい民主主義のあり方を解明することを目指したものである。

従来、民主的制度の観点から論じられることの多かったパプア・ニューギニアの政治に対して、著者は次のような問いを立てて、新たな民主主義観を論じる。(1) インターネットメディアが権力濫用の監視に対してどのような影響を与えているか。(2) それらの影響は伝統的なメディア・ジャーナリズムと比べてどこが異なるのか。(3) インターネットメディアは、パプア・ニューギニアの政治・民主化に貢献できるかという問いである。議論に際して、著者は2007年(パプア・ニューギニアにおいてインターネットが登場した年)以前と以降と分けて、テレビ、ラジオ、新聞などの伝統的メディアが支配的であった時代の政府監視、政治参加の検討を行い、それとの対比で、2007年以降の政府監視、政治参加の検討を行うことで、パプア・ニューギニアにおける民主化のみならず、非西欧世界における民主主義の理解を得ることが可能となると主張している。

論文はイントロダクションを第1章として、著者の問題関心と方法が述べられる。

第2章は、選挙や政党などの権力チェックの伝統的制度の形式的整備にもかかわらず、パプア・ニューギニアにおけるこれら諸制度の機能の不十分さとデジタル時代における権力監視や政治参加の新しい仕組みへの移行を論じ、その上で、今日の民主主義をよりよく理解するために「モニターデモクラシー」という概念を導入している。特に著者が強調するのは、今日では形式的な参加を超えた参加が求められるようになってきているばかりではなく、デジタルメディアの登場によってそれを支える条件ができていたということである。

第3章では伝統的なメディアを検証している。本論文ではラジオ、テレビ、新聞が詳細に検討され、パプア・ニューギニアでは、国家形成、国家の発展を形成する「development journalism」と呼ぶべきものになっていたこと、結果として、こうしたメディアでは有効な参加や権力監視はできていなかったことが述べられる。

第4章では、パプア・ニューギニアにおける新たなデジタル技術の登場が論じられる。1990年代以降、国家的な改革の中で国家に独占されていたさまざまな市場が国際的に開放され、それによって新たなデジタル技術が導入された。これが市民意識を改革し、透明性と説明責任というパプア・ニューギニアには根付いていなかった西欧型のメディアのあり方が次第に根付きはじめたことが論じられる。

第5章ではデジタル時代の新たな政治文化をそれ以前と比較するために二つの事例を取り上げる。両事例は、政治家の金銭的なスキャンダルであるが、伝統的なメディアが有力であった前者の場合は、

情報がコントロールされ、批判的な運動は生じなかったが、後者では、ソーシャルメディアからの情報が共有されることで、市民からの批判が起こった事例である。

最後の第6章では、結論として、国家によって統制された伝統的メディアとデジタル時代の情報流通のあり方との対比を通じて、新たな政治文化の登場と民主主義の実質化の進展を確認している。

こうした著者の主張は、今日、デジタル技術の発展が政治に新しい動きをもたらしている先進諸国においても問われている、今最も注目を集めている問題への回答ともなっている。パプア・ニューギニアの経験を詳細にたどり、同時に理論的研究にも十分な目配りをするすることで、デジタル時代の民主主義の問題に切り込んだ本論文の成果は高く評価される。著者が用いた「monitoring democracy」概念と政治参加の関係やソーシャルメディアがもつプラスマイナス両面の評価など、さらに詰めるべき問題は指摘しうるが、これらは本論文の価値を下げるものではない。以上の所見によって本審査委員会はこの論文を合格と判断した。

【最終試験の結果の要旨】

1月22日に第1研究会室において最終試験を行った。

口頭試問では、今日のソーシャルメディアの働きが政治に影響を与えている点、とくにアメリカ大統領選での現象との関連で、デジタル技術が持つ両義性などに関する質問、著者の言う「monitoring democracy」という概念の必要性和新しさについての質問、伝統的メディアと新しいデジタルメディアの共存性に関する質問、デジタルメディアの国民統合への貢献に関する質問など、多岐にわたって議論が行われた。

とくに、アメリカ大統領選でのソーシャルメディアの役割は大きなものがあり、ソーシャルメディアの役割を強調したワーギライ史は、ソーシャルメディアがもつ両義的意義について見解を提示した。これは同時に、デジタルメディアが国民的統合を果たすのか、それとも分断するのかという問題とも関連しており、パプア・ニューギニアの民主主義の将来的発展に関しても、楽観視はできない点などが論じられた。民主主義の様々な概念について、その整理に一部課題は残るものの、適切な理解に基づいた議論を展開した。

このような議論を通じて、論文提出者のフランシス・ワーギライ君の、政治学的知識の確実な蓄積と勉学の成果が確認できた。

よって本委員会は、最終試験を合格と判断した。

【審査委員会】

主査	伊藤	洋典
委員	鈴木	桂樹
委員	阿部	悠貴
委員	慶田	勝彦